

姫路城の決闘！

若原右京vs伊木豊後

そもそも城下町は、城主の居城を核とした家臣団および町人の集住地です。姫路城の場合、一部未
 完成な箇所があるものの、総構が城下町のほぼ全体を囲繞しています。総構は、町と村との境界線
 であると同時に、城郭の防衛線でもありました。しかし、総構の防御能力も兵士の守備体制が整って
 いて初めて十分な機能を発揮できるというものです。守備隊内部の統率が乱れて、陣形が整わないよ
 うなことがあれば、防御は機能不全となります。

実は姫路城において、そうした事態に陥ったことがあったとされています(橋本政次『姫路城史』上
 巻、名著出版、1973復刻)。

伊木豊後と若原右京矛楯の事あり…或時右京姫路に登城せんとして大手より下馬し歩行しけるに、豊
 後鍵持の男両足投出し打仰せて髭をぬき居りしか、右京其前へ来れとも出したる足を引んともせず…
 その俛彼か両足斬り落し、登城はせずして引き返し急ぎ馬に打乗、己屋敷に馳帰り、豊後程なく寄来へき
 そ、其用意せよとて与力の侍五拾騎・足軽式百人に自分の人数を加へ屋敷の四方に透間なく配り、鉄
 炮をは皆屋根へあけ自身も六文目の鳥銃をもって書院の棟に打跨り、豊後來らは搏取んと待掛たり豊後
 も右京か屋敷に押寄んと聞きたり、此よし国清公聞しめし急ぎ御使をもって先豊後を召、今日右京か仕形
 其方立腹は尤なり、去ながら只今押寄闘撃に及ひなんことは我に対して堪忍あるへし、其方遺恨なき様
 に申付へしと仰有…(「国清公言行」、『池田家履歴略記』所収)

池田家を守る中核となるべき重臣同士の激しいがみ合いがおきたのでした。当事者の一人、伊
 木豊後守忠次は、当時池田家中第一の重臣で、播磨国境守備の要である三木城主でもありました。
 一方の若原右京亮良長も池田家中および領国支配を任された重臣でした。いずれも大名クラスの領
 知を持つ大身です。例えば、伊木は姫路において常に300人もの伴廻りを引き連れていたといいま
 すから、まさに大名行列並みです。一方の若原も「右京主殿にや及ひもないか せめてなりたや殿様に」と播
 磨の童謡で唄われるほどの権勢でした(『池田家履歴略記』)。彼らは、ややもすれば自身が大名にな
 っていてもおかしくない人たちですから、独立心と相手への対抗意識は強烈だったに違いなく、些細
 なことがきっかけで闘争となる危険性も秘めていました。

さて、若原が立て籠もった屋敷はどこだったのでしょうか。右図は池田利隆時代の姫路城中曲輪を
 描いた絵図の写本です。武家屋敷の配置は輝政時代と全く同じとは限りませんので、あくまで参考と
 して掲載しました。恐らく、輝政時代も大手前あたりに屋敷を構えていたとみられます。伊木も若原と



池田利隆時代の城下図部分(原図：岡山大学池田家文庫)

①「伊木長門」 ②「伊木主膳」 ③「若原監物」

同じでしょうから、隣接する屋敷の間で合戦が行われようとしていました。“布団おばさん”のような
 狂った隣人も困りますが、鉄砲をもって屋根の上で待ち構える隣人にも難儀します。そのうえ、「与
 力」も合力しています。重臣はそれぞれ「備(そなえ)」という軍団を編成し、その「備」に属する池田
 の家臣が何人もいます。それらが与力として重臣と「備」を支えていますので、若原の与力の屋敷に
 もやる気満々の兵士たちがいたと考えられます。一方の伊木方にも当然与力がいたはずですから、
 若原・伊木の屋敷がある大手前以外の武家屋敷でも、状況次第では若原方と伊木方で衝突が起き
 たかもしれません。

幸い、伊木と若原の武力衝突は回避されました。主人の輝政の機知に富んだ策により両者間の
 調停が図られたからです。もっとも、左記の記事は「国清公言行」という項目が示すように、輝政(国
 清)の大名としての資質を顕彰するエピソード紹介に重点があります。したがって、伊木と若原のい
 がみ合いの話も若干割り引いて読んでおく必要はあります(左記の記事のラストでは、輝政のおか
 げで伊木と若原が仲睦まじくなったというオチになっている)。しかし、本当に両者の間に火蓋が切
 られ、どちらかが焼土作戦にでも出ていたとしたら、場所が場所だけに城にまで何らかの被害が及
 んでいたかもしれません。

輝政はとても背が低く、同僚の大名からも笑われたことがあったそうです。見栄えで笑われても、
 家中を統率する力やその苦勞を笑える者はそれほど多くはなかったはずで、主人そっちのけで
 大喧嘩を始める重臣がいては、輝政もいろいろ気を揉むことが多かったことでしょう。